資料３

１　子どもの育ち・学びへの支援

（1）教育よろず相談

相談状況（学校訪問を含む）

平成３１年３月３１日現在

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	のべ総件数	相談者別件数
電話		2	3	1	4	0	3	11	23	10	17	20	14	108	29
来所	（教育センター職員）	3	2	5	5	3	1	9	16	5	18	6	3	76	31
	（臨床心理士相談）	11	14	20	12	17	20	21	17	11	7	14	18	182	47
その他															
合計		16	19	26	21	20	24	41	56	26	42	40	35	366	107

児童生徒から	学習・進路・生活														
	いじめ														
	不登校・行き渋り					1		2		3			3	9	4
	学校・教師														
	その他											1	2	3	2
保護者から	学習・進路・生活								3		1			4	3
	いじめ														
	発達障がい等	5	3	5	4	2	5	3	2	2	5	5	8	49	12
	不登校・行き渋り	4	3	7	5	10	5	7	5	4	4	4	6	64	16
	学校・教師の対応	1					1						1	3	2
	子ども理解	1	4	2	4	2	3	3	4	1	7	4		35	7
	その他		2	3					1	1	1		2	10	3
教職員から	学級指導・学習指導	3	3	2	1	1		9	14	6	6	4	1	50	17
	職場の人間関係		1				1					3		5	2
	保護者との関係		1		1			6	8	3	12	9	5	45	13
	子ども理解		1	4	4	4	1	7	10	3	1	4	1	40	14
	その他	2	1	3	2		8	4	9	3	5	6	6	49	12
その他															
合計		16	19	26	21	20	24	41	56	26	42			366	107

＊ 同一の相談者であっても、相談内容の異なる場合は別カウントします。

学校訪問		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	のべ総件数	相談者別件数
訪問回数		33	26	19	13	12	39	24	34	20	11	10	17	258	119
主な懇談内容	学校経営	32	15	13	7	10	35	17	15	6	3	1	10	164	81
	教職員の資質向上	1	1	2										4	4
	問題行動の対応		5	2		2	3	4	12	10	5	3	3	49	16
	その他		5	2	6		1	3	7	4	3	6	4	41	18

＊ 相談者は原則学校（園）長であるが、相談内容の異なる場合は別カウントします。
＊ 相談者は原則学校（園）長であるが、時に所属職員となる場合がある。その場合は別カウントします。

「教育よろず相談」を振り返って　　（平成３１年３月３１日現在）

教育センターが開設されて６年目。本年度「教育よろず相談」の状況を前年度と比較してみると、

		（前年比）
○教育よろず相談のべ件数	３６６件	（－５４）
	実質相談者数（１０７名）	（－３２）
◆ 電話による相談	２９名	（－１４）
◆ 来所による相談	３１名	（－４）
◆ 臨床心理士による相談	４７名	（－１４）
その他	０名	（±０）

○ 学校訪問のべ回数　　２５８回　（＋３５）

スクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）が配属され４年目となった。学校現場の状況をふまえ、課題の解決に向けて訪問を重ねながら、学校のニーズに応える支援に努めた。学級経営の行き詰まり等困難なケースについては継続支援となる場合もあり、訪問回数は年々増加している。

○相談者の内訳

教職員	保護者	子ども
５８名	４３名	６名
１０７名	１０７名	１０７名

○ 相談内容について上位をしめるものを順にみると、以下のような結果となる

《教職員からの相談》

① 学級指導・学習指導
② 子ども理解
③ 保護者との関係
③ 職場の人間関係
⑤ その他

《保護者からの相談》

① 不登校・行き渋り
② 発達障がい
③ 子ども理解
④ 学習・進路・生活
⑤ 学校・教師の対応
⑥ その他

《児童・生徒からの相談》

① 不登校・行き渋り

○相談を通して・・・・・

・これまで増加傾向にあった相談件数は本年度やや減少している。中でも保護者からの学校対応に対する相談が減少した。これは学校が各相談機関との連携やスクールカウンセラーの活用、さらに家庭との連携を密にしながら、きめ細かな対応に努めていることも大きな要因と考えられる。
・学校訪問回数は増加している。年度始めの４月と、一般的に子どもの自殺や不登校が懸念される夏休み明けの９月に市内全小・中学校を訪問し、気になる子どもの状況をはじめ学校全体の様子や課題等を把握した。また随時訪問を実施し、管理職面談や授業参観、保健室の状況把握等を行いながら、問題行動等の未然防止に努めた。
・特に小学校での中・高学年を中心に、学級集団が落ち着かず授業が成立しにくい状況が続くなど、学級経営の課題が見られた。基本的な学習規律や生活規範等の定着は低学年からの積み上げが大切であり、全職員の共通理解のもとチーム学校で計画的・継続的に取り組むことの必要性を感じる。
・問題行動をはじめ、不登校や行き渋り、発達障がい等、子育ての中での悩みは多岐にわたり、子ども理解に悩む保護者や教職員の姿がある。目の前の子どもの実態から、子どもをどのように理解し、関係をどのように構築していけばよいのか、指導に行き詰まり悩んでいる教職員からの相談も少なくない。若い教職員が増加傾向にある中、相談者に寄り添いながらともに改善策を見いだしたり、スクールカウンセラーや臨床心理士、子ども発達センター、医療機関等につなげたりすることで、関わり方の方向性が見え、相談者の心の安定の一助となっている。
・ＳＳＷは随時学校訪問を行う中で、相談を受けた喫緊の課題に対しては、校内の生徒指導部会や研修会等に参加したり、関係機関との連携を図ったりしながら、学校とともに解決の糸口を模索してきた。また保護者会にも同席し、専門的な見地から助言や情報提供を行いながら、学校と家庭との関係づくりに努めた。学校と家庭とのより良い連携が、子どもの安心・安定につながっている。

・不　登　校　相　談

【通級来室児童生徒数】　　名張市適応指導教室

（月）	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
正式通級	0	4	8	8	4	10	10	10	10	15	15	11
来室	11	7	4	4	1	5	5	6	7	5	7	5
小学生	3	3	3	3	4	3	3	3	3	4	5	4
中学生	8	8	9	9	1	12	12	13	14	16	17	12
計	11	11	12	12	5	15	15	16	17	20	22	16

【電話件数】

① 対象者別

（月）	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
小 学 生	13	19	13	8	0	19	13	21	17	18	37	20	198
中 学 生	52	32	39	31	14	81	75	52	37	36	61	47	557
高 校 生	0	0	2	8	6	0	0	0	0	0	0	3	19
計	65	51	54	47	20	100	88	73	54	54	98	70	774

② 相談者別

（月）	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
小 学 生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中 学 生	0	5	4	1	1	2	6	4	1	3	2	2	31
高 校 生	0	0	0	6	5	0	0	0	0	0	0	0	11
保護者他	19	19	18	16	3	40	28	18	20	24	31	23	259
担任　他	46	27	32	24	11	58	54	51	33	27	65	45	473
計	65	51	54	47	20	100	88	73	54	54	98	70	774

【来室件数】

① 対象者別

（月）	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
小 学 生	52	91	94	54	8	61	127	116	58	79	117	43	900
中 学 生	49	123	121	68	15	136	201	175	87	123	198	102	1398
高 校 生	4	6	1	2	14	4	1	2	4	7	3	1	49
計	105	220	216	124	37	201	329	293	149	209	318	146	2347

② 相談者別

（月）	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
小 学 生	23	41	43	22	4	28	53	51	25	33	50	21	394
中 学 生	22	57	54	29	3	49	82	73	38	50	89	42	588
高 校 生	2	3	0	2	13	0	0	1	2	0	1	1	25
保護者他	48	106	108	61	8	86	149	140	67	85	151	73	1082
担任　他	10	13	11	10	9	38	45	28	17	41	27	9	258
計	105	220	216	124	37	201	329	293	149	209	318	146	2347

【学校訪問　他】件数

① 対象者別

（月）	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
小 学 生	27	7	6	7	0	0	8	5	9	3	4	11	87
中 学 生	52	18	13	17	8	13	19	13	40	3	14	22	232
高校・一般	6	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	26
計	85	25	19	24	28	13	27	18	49	6	18	33	345

② 訪問件数

（月）	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
小 学 校	3	4	3	4	0	0	3	2	6	1	3	7	36
通級生以外	24	3	3	3	0	0	5	3	3	2	1	4	51
中 学 校	7	8	8	6	3	9	15	11	34	1	12	19	133
通級生以外	45	10	5	11	5	4	4	2	6	2	2	3	99
他の機関	6	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	26
計	85	25	19	24	28	13	27	18	49	6	18	33	345

・発達相談（子ども発達支援センターとの連携）

１、連携会議

教育センター（学校教育室兼務）指導主事と子ども発達支援センター教育専門員が、学齢期の子どもたちの発達に関する情報交換を随時行っている。

２、拡大連携会議・教育福祉連携会議

学校教育室（室長・指導主事）、教育センター（センター長・指導主事）と子ども発達支援センター（センター長・保健師・保育士・教育専門員）が連携会議を行っている。「途切れのない支援システム」の構築に向けて、具体的な幼稚園保育所（園）から小学校への引継ぎ方法やシステムの見直し、また、小中学校での特別支援教育が、他機関と連携しながら改善していくためのシステムの見直しなどを行っている。＜平成 30 年度４回＞

３、合同コーディネーター連絡会

学校教育室と子ども発達支援センターの共催で、小中学校の特別支援教育コーディネーターと保育所（園）・幼稚園の発達支援コーディネーター合同の研修会を開催した。

４、チーフコーディネーター会議

月 2 回程度、チーフコーディネーター会議が行われる。子ども発達支援センターの教育専門員２名が参加し、対象児の特性や支援の目標、支援方法などについて助言を受けている。また、校内支援（１次支援)、チーフコーディネーター会議（２次支援）を経て、３次支援として子ども発達支援センターが関わることに決まったケースについては、当会議にて報告を受けている。

５、特別支援教育担当者研修

子ども発達支援センターの教育専門員が研修会講師を担当し、子どもとの関わり方や支援のポイントについて提案した。

６、就学に向けての連携

学校教育室指導主事と５歳児健診や個別乳幼児に関わった子ども発達支援センターの保育士や保健師が、就学について適切な助言を保護者に行うために、適時、連携を取り合い情報共有している。

７、教育センターのよろず相談等との連携

教育センターのよろず相談の教育専門相談員等と子ども発達支援センターの教育専門員が連携を取り、必要な場合は情報を共有し、お互いの相談機関を保護者に紹介し、保護者の悩みが少しでも軽減できるようにしている。

８、不登校支援の連携

さくら教室の通級生について、必要に応じて子ども発達支援センター教育専門員にアセスメントを依頼し、支援の手立てやスタッフの役割と動きなどについて助言を受けている。

９、ばりっ子チャレンジ教室

子ども発達支援センター教育専門員にスタッフとして入ってもらい、目標設定や支援計画の作成、当日のサブリーダー等の役割を担ってもらっている。

10、ばりっ子わくわくキャンプ

子ども発達支援センター教育専門員にスタッフとして入ってもらい、支援計画の作成や準備の手伝い、当日のサブリーダー等の役割を担ってもらっている。

11、特別支援学級の巡回

本年度から新規実施。小学校の特別支援学級を子ども発達支援センター教育専門員が巡回を委託し、担任に助言してもらっている。

平成30年度　教育専門員実績

2019/4/5

＜学校への訪問回数＞

小学校	相談訪問	学校の要請3次支援	チャレンジ教室関係	外来との連携	定期巡回訪問	計
4月	2	0	0	1	0	3
5月	2	6	0	2	8	18
6月	5	3	0	0	8	16
7月	2	3	0	1	0	6
8月	3	0	0	3	0	6
9月	5	0	0	0	2	7
10月	1	0	2	1	10	14
11月	5	2	0	0	4	11
12月	4	1	0	2	6	13
1月	1	3	0	1	1	6
2月	3	3	0	0	0	6
3月	4	1	1	3	0	9
合計	37	22	3	14	39	115

中学校	相談訪問	学校の要請3次支援	外来との連携	定期巡回訪問	計
4月	2	0	0	0	2
5月	2	0	0	3	5
6月	0	1	1	2	4
7月	0	3	0	0	3
8月	0	1	0	0	1
9月	1	0	2	0	3
10月	0	0	1	0	1
11月	0	0	0	0	0
12月	0	0	0	0	0
1月	0	0	2	0	2
2月	0	0	0	0	0
3月	0	0	1	0	1
合計	5	5	7	5	22

＜児童生徒観察人数＞

小学校	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
4月	0	1	0	0	0	0	1
5月	1	0	3	1	0	0	0
6月	0	0	1	0	1	0	2
7月	0	0	0	1	1	0	2
8月	0	0	0	0	0	0	0
9月	1	3	3	3	3	2	15
10月	5	10	18	10	3	2	48
11月	0	1	0	1	0	0	2
12月	0	0	0	2	2	0	4
1月	0	1	0	0	1	0	2
2月	2	1	0	1	1	0	5
3月	0	0	0	0	0	0	0
合計	9	17	25	19	12	4	18

中学校	1年	2年	3年	計
4月	1	0	0	1
5月	1	0	1	2
6月	0	0	0	0
7月	0	1	0	1
8月	0	0	0	0
9月	0	0	0	0
10月	0	0	0	0
11月	0	0	0	0
12月	0	0	0	0
1月	0	0	1	1
2月	0	0	0	0
3月	0	0	0	0
合計	2	1	2	5

<対象別相談件数>

小学生	合計
4月	13
5月	24
6月	7
7月	21
8月	14
9月	10
10月	15
11月	16
12月	20
1月	22
2月	18
3月	11
合計	191

中学生	合計
4月	14
5月	10
6月	3
7月	8
8月	5
9月	14
10月	9
11月	4
12月	13
1月	13
2月	14
3月	14
合計	121

高校生	合計
4月	2
5月	3
6月	2
7月	0
8月	2
9月	0
10月	2
11月	0
12月	3
1月	1
2月	0
3月	0
合計	15

※ 訪問・相談 ⇨ 件数
※ 観察 ⇨ 実人数

◎ 必要に応じて、適時、学童保育・適応指導教室・どれみ・家庭児童相談所などとも連携している。

◎ 外来と学校の連携については、学校訪問のみカウント。電話での連携はカウントしていない。

（２）適応指導教室（さくら教室）

１．通級・利用の状況（平成３１年３月末現在）

	小１	小２	小３	小４	小５	小６	中１	中２	中３	合計
男子	０	０	０	０	１	１	１	５	３	１１
女子	０	０	０	０	２	１	２	６	４	１５

２．通級生への支援

○ 多様な体験活動の導入

● ４月（じゃがいも植え）　● ５月（夏見遠足）　● ６月（市役所訪問、ボーリング体験）
● ７月（スライム・木工作品作り、フラワーアレンジメント、レストラン、じゃがいも掘り）
● ８月（卒業生との交流会）　● ９月（キッズプラザ大阪社会見学、調理実習）
● １０月（図書館利用、読み聞かせ）　● １１月（赤目滝ハイキング、フラワーアレンジメント、レストラン）　● １２月（買い物学習、調理実習、花植）　● １月（正月遊び）
● ２月（フラワーアレンジメント、レストラン）　● ３月（お別れ会）

○ ボランティアの協力

教室でのメンタルフレンドや体験活動の指導者、活動時の補助として、学生等からボランティアスタッフを募集し、３名の学生に週１回程度の割合で来てもらった。

３．保護者および教職員への支援

○ 適応指導教室相談員による不登校相談・・・随時

○ 「ちょっとホッとの会」《保護者バージョン》《教職員バージョン》

臨床心理士の森川泉さんを講師として招聘し、日頃保護者や教職員が悩んでいることに答えてもらったり、寄り添うお話をしてもらった。保護者対象では年間２回、教職員対象では年間１回行った。

○ 臨床心理士によるカウンセリング

臨床心理士による教育相談を実施した。【原則毎週金曜日（山田忍さん）、年間８回土曜日（木村敦裕さん）】

４．卒業生への支援

〇卒業生との交流会

夏休みに、さくら教室を卒業した先輩と通級生が交流した。通級生にとっては進路を考えるよい機会となった。（１３人参加）

５．調査・統計

○ 不登校・不登校傾向児童生徒報告のまとめ

市内における不登校児童生徒の動向の把握、および入級や相談の際の資料とした。心因的なことによる不登校より、発達に課題のある児童生徒が学校生活で不適応をおこすケースが増えてきている。

６．学校等との連携、各種会議・研修会参加

○ 学校訪問

通級生の在籍校やその他の学校全てにも学校訪問を行い、状況の把握や情報交換を行った。

○ 情報発信

ホームページを活用し、教室の活動等の情報発信を行った。

○ スーパービジョンの開催

小児科医（小林穂高医師・・学期に１回）、臨床心理士（山田忍 Co.・・原則毎週金曜日、木村敦裕 Co.・・年間８回土曜日）

○ 教育相談担当者会の運営

１学期　名張市の現状、教育相談担当者の役割の説明

夏季休業中　「ちょっとホッとの会」【教職員バージョン】への参加

○ 相談機関打ち合わせ会議の開催

毎月第１木曜日、各相談機関が集まり情報交流を行った。

○ 学教教育室および教育センターとの情報交流の開催

・毎月１回、適応指導教室の現状および個々の児童生徒の状況について、学校教育室（室長・生徒指導担当指導主事）と情報交流を行った。

・毎月１回、名張市内小・中学校の不登校および不登校傾向児童生徒の状況について、教育センター長および生徒指導担当指導主事との情報交流を行った。

○ 各種会議・研修会への参加

・国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催された、平成３０年度全国適応指導教室連絡協議会『第２５回全国会議』に参加し「学校に行きにくい子どもたちを支える支援体制の整備」というテーマで発表。

・全国適応指導教室連絡協議会東海北陸地域会議石川大会に参加

・市のケースカンファレンスおよびケース会議への参加

・教育相談研修地域支援研修会および三重県教育支援センター指導員実践交流会に参加

〇講演会への参加

・「子どもの発達障害」　講師：名張市立病院小児科医師　小林 穂高さん

７.本年度の成果と課題

〇子どもの実態と課題に沿った体験学習を行うことで、意欲や自信が高められ、自己有用感を感じ安定した通級につなげることができた。

〇担任との情報共有を密にすることで、支援方針の一致を図ることができ、学校および適応指導教室の両面から通級生や保護者に対して、より充実したアプローチをすることができた。

〇教育センター職員や学生ボランティアのおかげで、幅広い体験活動や、よりきめ細やかな支援をすることができた。

● 発達に課題があり、学校で不適応を起こして相談に来るケースが増加している。まずは、学校で必要な配慮、支援が受けられるようにより一層、学校との連携を強めていきたい。

● 通級が長期化している子どもへの支援に苦慮する。進級、進学の機会を大事にしたい。

（３）発達支援教室

・ ばりっ子チャレンジ教室

１．　目的

小学校低学年を中心に、集団行動ができにくかったり、人との関係をうまく構築できなかったりする社会性や行動面で困り感のある子どもに、小集団場面でその困り感の原因やよりよい学校生活を送るための手だてを模索するとともに、それらを学校現場と情報共有しながら、現場での支援の充実を図る。

２．　対象

原則として、小学校第１、２学年の通常の学級の児童を対象とする。（名張小、百合が丘小を除く。）発達障がいのある、または、「発達障がいの疑いのある」と認められる社会性や行動面で困り感のある児童。診断の有無は問わない。

３．　実施日および活動内容

前期	実施日	主な活動内容
第１回	６月　９日	リズム、サーキット、じゃんけんゲーム
第２回	６月２３日	リズム、サーキット、製作（紙ずもう）、じゃんけんゲーム
第３回	７月　７日	リズム、サーキット、製作（紙飛行機）、「まねっこしよう（模倣）」
第４回	７月２１日	リズム、サーキット、いすとりゲーム、「まねっこしよう（模倣）」
第５回	８月　４日	リズム、サーキット、風船バレー、よく聞くプリント
第６回	８月２５日	リズム、サーキット、風船バレー、よく聞くプリント
第７回	９月　１日	リズム、聞きとりゲーム、忍者検定（サーキット）
第８回	９月　８日	リズム、聞き取りゲーム、忍者検定（サーキット）

後期	実施日	主な活動内容
第１回	１０月２０日	リズム、サーキット、じゃんけんゲーム
第２回	１１月１０日	リズム、サーキット、製作（紙ずもう）、じゃんけんゲーム
第３回	１１月２４日	リズム、サーキット、製作（紙飛行機）、「まねっこしよう（模倣）」
第４回	１２月　８日	リズム、サーキット、「まねっこしよう（模倣）」、椅子取りゲーム
第５回	１２月２２日	リズム、豆つかみゲーム、３ヒントクイズ、風船バレー
第６回	１月１２日	リズム、豆つかみゲーム、３ヒントクイズ、風船バレー
第７回	１月２６日	リズム、聞き取りゲーム、忍者検定（サーキット）
第８回	２月　２日	リズム、聞き取りゲーム、忍者検定（サーキット）

４．参加者数、見学者数等

	参加者		保護者		見学		ボランティア		合計	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
第1回	6	6	8	8	10	3	4	2	28	19
第2回	6	6	6	6	7	9	2	3	21	24
第3回	5	6	6	7	1	3	3	2	15	18
第4回	6	7	6	8	12	3	2	3	26	21
第5回	5	6	6	7	7	7	2	4	20	24
第6回	4	6	4	8	0	5	1	2	9	21
第7回	5	7	5	8	4	8	2	2	16	25
第8回	6	6	6	7	2	2	2	3	16	18
合　計	43	50	47	59	43	40	18	21	151	170

※　見学者：市内教職員（管理職、当該校学級担任、市内特別支援学級担任、初任者等）
　　県内特別支援教育関係者、他市行政職員、医療関係者
※　ボランティア：名張市看護専門学校、三重大学、天理大学の学生

５．活動場所　子ども：中会議室２、多目的スペース　　保護者：中会議室１

６．カンファレンス
　実施前（水曜日）：プログラム、個別の指導計画の目標設定と手だての検討（２時間程度）
　実施前（金曜日）：プログラムの修正、確認（２時間程度）
　実施後（土曜日）：個別の指導計画の目標の到達度の確認、手だての有効性の検証

７．　スーパーバイズ
　中村　みゆき：教室のプログラムについて、保護者向け子育てに関する話

８．保護者への活動報告
　個別の指導計画の作成、送付＜学校経由＞

９．その他
・　教育専門相談員による保護者面談

＜成果＞
・　子どもの参加に関し、学校と連携して対称者を選定することができた。
・　子どもの特性に応じて、多様なプログラムを組むことができた。
・　８回の中で、子どもの実態把握を丁寧に行い、手だてを検証することができたので、教室においては、子どもの望ましい行動が見られるようになった。
・　スーパーバイザーを活用することにより、子どもの困難の要因分析が正確になり、有効な手立てを講じることができた。また、保護者との懇談会をもつことで、保護者にも満足できるものとなった。
・　相談員と保護者との面談を通して、保護者の子ども理解が確実に深まっていった。
・　運営に関しての仕組みが確立しており、スムーズに実施できた。
・　これまでの事例をデータベース化することで、より効率にカンファレンスができるようになった。

＜課題＞
・　本年度は最大７名の参加であったが、参加人数が６名を超えると保護者対応やカンファレンスに十分な時間をとれなくなるため、定員は６人としたい。
・　プログラムは、各期ごとに見直し、多様な活動を取り入れているが、さらに子どもの実態に応じた取組ができるよう、スタッフが研修を重ねていきたい。
・　学生ボランティアの参加が少なかったので、募集方法を工夫したい。
・　研修講座としての教員の参加増えてきているが、若手教員を中心にさらに参加を呼び掛けていきたい。

＜今後の方向性＞
・　学校と連携した参加児童の選出。
・　研修講座としての教員の参加者の向上。
・　保護者支援の充実。

・ばりっ子わくわくキャンプ

１．実 施 日　平成３０年８月２０日（月）、２１日（火）

２．場　　所　名張市子どもセンター、曽爾青少年自然の家

３．対 象 者　市内特別支援学級在籍　小学３年生、４年生

４．参加者数　４年生　９名

５．ボランティア　教員ボランティア８名、名張市立看護専門学校生３名
三重大学生３名、曽爾青少年自然の家ボランティア３名

６．活動経過
６月　上旬　実施決定・実施計画（案）、保護者用案内・チラシの作成
６月２１日　チラシの配布
６月２４日　曽爾青少年自然の家との打ち合わせ・下見
７月　中旬　しおりの作成
７月　５日　参加募集締め切り、事前調査票の作成・送付・回収
【事前調査票：アセスメントシート、問診票、緊急連絡先】
７月　上旬　事前学習用の資料作成
７月　下旬　シフト表の作成
８月　３日　第１回事前学習（保護者説明会を兼ねる。）
・　キャンプの概要、　日程・送迎について、持ち物の確認、
緊急連絡について（保険証の写し）
８月１７日　第２回事前学習
・　役割分担、リハーサル
８月２０日　当日
８月２８日　事後学習

＜成果＞
・　運営に関しての仕組みが整い、スムーズに実施できた。
・　保護者や学校と連携して、必要な参加児童の情報を得ることができた。
・　雨天用のプログラムでも子どもたちは活動を楽しむことができた。
・　プログラムは例年行っている内容であるが、子どもの実態に合っており、有意義な活動ができている。
・　特別な支援を必要とする児童が、夏休みを有意義に過ごすことができる場となっている。
・　参加児童の学校を中心に研修講座として参加する教員が多くいる。

＜課題＞
・　学生ボランティアの確保。（大学生の試験や実習時期を考慮）
・　教員ボランティアの確保（キャンプリーダーが必要）。

＜今後の方向性＞
・　３・４年生対象という方向で続けていきたい。
・　学校で５年生での野外活動時に活用できるように支援の引継ぎを行う（活動報告書の作成）。